

欲生心の象徴的自覚

5

本多弘之

honda hiroyuki

親鸞は、選択本願の中心たる第十八願に「信心を誓う願」という意味を見だし、「至心信楽の願」と名づけられた。そして、『教行信証』「信巻」で、その願の「至心・信楽・欲生」という三語が三心という意味をもつとし、いわゆる三心一心の問答（三一問答）を展開して、凡夫に本願が成就して成り立つ真実信心の意味を説明された。

その場合、「欲生我国」は如来から衆生に呼びかける招喚の意味をもつのだ、と言われ

る。それで、「欲生心」とは、如来の衆生に対する「勅命」であるとされる。この如来からの勅命という言葉が、愚生にとつていつまでも腑に落ちるものにならなかった。自己の外部から何かを聞き取るという表現の意味が、自己にとつて親しいことがらにならなかった。これについて、いささか了解の糸口が開けてきたのは、機の三願たる第十九・二十・十八願に共通する「至心」と「欲生」が一貫して如来の真実を表す言葉であり、その間に挟ま

る「発願」、「回向」と「信楽」に、衆生の自覚の展開があると見たのが、親鸞の見方だったのではないかと、と気づいてからだ。至心は真実であると積され、真実は如来の属性であつて、凡夫はそれに属することのない不実・虚偽・虚仮・雑毒であるとされる。これらを用いる「機の深信」に立つて、我ら衆生の不実性、流転の三界の性質とされるのである。つまり、迷いのなかには絶対に真実はないということを自覚せよ、との衆生の



存在規定なのである。このことが、教えを聞き始めたころには、どうしてもうなずけなかった。人間のあり方のなかに、真実も不実もあるのではないのか。人間がまったくの不実でしかないとは、どういう意味なのか。人間の外に真実を立てることに、何の意味があるのか。絶対の他者を立てないはずの仏教において、自己の外という表現をどう考えるのか。こういうことが聞法を先に進めさせない障壁となっていたのである。

目覚めをくぐって真理に触れた立場からはたらきを「如来」と名づけるのであるから、「外」とは正覚の側を言うのであって、迷いのなかで考える「外」ではないのだ、ということが親鸞の論理を生み出している。これに気づけば、迷いを生きている凡夫は全面的に闇のなかに没在しているのであり、明るみはその外として表現されざるをえない。その気づきから、「真仏土」を「無量光明土」とし、土の主たる如来を「不可思議光如来」と名づける意味がほの見えてくるであろう。この無明の闇から大悲の智恵への意識の転換において、内と外という表現が出されているということだったのである。

そして、闇から光へはいかに努力しようとも出られない、それが「無有出離之縁」(出離の縁あることなし)という機の深信の押さえであり、大悲は一如より来生して光のはた

らきを恵むために、無限を没して有限に表現するのだ、それを回向と言うのだ、と了解できるようになった。その場合、至心が真実であるのみでなく、欲生心が如来の勅命であるとは、人間存在の根底に一如に触れようとする存在そのものの深みの意欲があることを表すのである。意識上に自覚されるより深く、生きることもがき苦しむことの存在論的な意味とでも言うべきものである。それがいのちの本来へ帰れという方向性へのさげびなのである。勅命とは、それに出遇うまでは衆生からは感知できない大悲からの表現である。無始以来の無明の黒闇が、宿業流転の背景として現在の生活にまで歩んできていること、その衆生の闇を担って流転を超えるべく生きている深層の意欲があるとの発見、それが法蔵菩薩の物語を生み出したのであった。

如来の欲生心が、一切衆生の存在の根底に、無明煩惱を生きる衆生の見えざる根底に、じつと目覚めを待つて歩み続けている。それはいわゆる意識上に自覚される「我」には感覚できない。だから「深層意識」である「阿頼耶識」のはたらきと照らし合わせられるのである。迷妄に自己を没して一切の経験の熏習を引き受ける阿頼耶識は、表層意識には見えてこないけれど、現実の身心の安危を共に引き受けて、黙って生命を持続させている。一切の生命機能たる諸根を保持し、一切の経

験の種子(可能性)を保って、黙っているのちと共に歩むはたらき。これは永遠に因位を持続する法蔵菩薩の意欲と同定されるようなはたらきなのである。

この阿頼耶識を自我が生きていると感じるのが、未那識と名づけられた作用である。この自我の意識から本来性に帰ろうと意識が動き出すとき、「発願」を自己の意欲として求道が始まる。それを第十九願が「修諸功德」として教えるのである。この願の作用において、三世を超えるためには、この世に死ぬことを必須とする。それを双樹林下往生と押さえられた。その限りでは、浄土往生と言っても、化身土への往生なのだとされるのである。

自力でこの自我を破ることの限界と自己矛盾に気づいて、本願に帰した場合でも、念仏を徳本と信じて行じながら、その功德を自己の所有と思つて、この世の事柄に役立てようと信じている。これを『大無量寿経』は「罪福心」と教える。この心はやはり臨終まで自己が行じて、その功德を「回向」して往生しようとする。それを親鸞は難思往生とされる。その場合も、やはり化身土への往生であつて、無量光明土は感じられないのだと言われるのである。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)
近著に「親鸞の名号論 根本言の動態的「了解」法蔵館